

分科会報告

模擬授業 高等学校公民科「現代社会」の討論授業

小野 繁樹 (埼玉県立越谷東高等学校)

はじめに

自分の頭でモノを考え、自分の言葉で何らか発信できる生徒を育成するためには、一人の教師が四十人相手に一方的にしゃべる「一斉授業」(講義式)という形式だけでは限界があることはとうに指摘されている。

この明治時代以来の授業方法は、教師のしゃべりの中身を聞く方は即座に理解できることを前提とする「きわめて高度な授業形態」(浅野誠『授業のワザ一挙公開』大月書店 2002年)であり、「一人前の研究者などの間で行われる研究会の方式」(浅野)なのであって、決して無条件にスタンダードであるというわけではない。

必要なのは、教師からの投げかけと生徒からの応答が繰り返される「双方向型」授業であり、また生徒同士が話し合いや協同作業をともにする「多方向型」授業である(この方向性を最近「アクティブ・ラーニング」と呼ぶ)。

とりわけ後者では、生徒たちは協同で何かを創り出すだけでなく、自己と他者を発見するきっかけをもつかみうる。

こうした授業を志向するうえで大きな位置を占めるのが「討論」授業であろう。

ここでは、高校一年生の「現代社会」で実施した討論授業の例を紹介しよう。

1 討論授業の展開, その前半

授業開始とともに教科書・ノートをしませ、鉛筆一本だけ出すよう指示し、討論授業の開始を宣言。

そのさい、それぞれの意見表明がいかに大切であることを強調し、討論というものの意義を明らかにする。

日本人の会議では、ずっと押し黙っている人がなんとなく大人物であるかのように思われるが、欧米人の会議でそれをやると、その人はこの世には存在しないものとみなされる。欧米人はよく自己主張すると言われるが、それは子どもの頃からディスカッション・トレーニングをうけているからである。

こう言ったとたん、生徒たちの目の色が変わり、討論に入るためのモチベーションにスイッチが入る。

テーマとして、現在世界中の人々が頭を抱える難問中の難問、「死刑制度に賛成か、反対か」を掲げる。

授業の前半は、「死刑制度」の現状と世界のすう勢について持ち込んだ教材と自作プリントを使ってレクチャーする。

まず、2007年、これまで死刑執行の氏名公表を拒んできた法務省が初めて公表に踏み切

ったさいの新聞記事, その見出し部分=「死刑, 初の氏名公表—法務省 3 人執行と発表」(『朝日新聞』2007 年 12 月 7 日)を数十倍に拡大したコピーを, 黒板の右半分に貼り出す。

さらに, 就任以来 1 年にも満たないうちに計 13 人の死刑を執行した元法相・鳩山邦夫に関する記事=「死刑粛々なお加速」(『同』2008 年 6 月 18 日)をやはり拡大コピーして貼る。そしてそれぞれについて簡単にコメントを加える。

新聞記者たちは紙面作りのうえで「見出し」に大きなエネルギーを注ぐ。本文を読んでもらうためにも, 読者の目を釘づけにするインパクトある「見出し」作りを狙う。

その効果は大きく, 貼り出された「見出し」の黒々と踊る大文字に, 生徒たちは息をのむ。

次に最新の世論調査の結果=「死刑制度を容認 80%—内閣府調査, なお高水準—」(『同』2015 年 1 月 25 日)を貼りつけ, 国民の大多数は依然制度維持を望んでいることに触れる。

次に自作プリントで「死刑制度」の現状(日本と世界)を紹介する。

2013 年現在, 世界の 3 分の 2 以上にあたる 140 か国が死刑を廃止し, とりわけ先進国は殆どが廃止するという動きの中で, アメリカと日本だけが制度を維持するが, アメリカは州によっては廃止しているところもあるので, 実質日本だけが先進国では丸ごと制度を残している。

黒板に注目させる。「死刑に関わる人々」と大書し, 黒板の全面を使って, 制度に関わる人々の人型マークを貼りつけ, それぞれの思いを吹き出しの中に入れてゆく。

歴代法相もその思想・信条によって制度への向き合い方は様々である。「法秩序を守るためサインする」と言う人もいれば, 信仰上サインを拒むクリスチャン法相もいた。

実際の執行現場で処刑台のボタンを押す刑務官らの立場は厳しい。そのうちの一人は「自分がどんな仕事をしているのか, 家族にも打ち明けられない」と漏らす。

生命を大切に論ず立場でありながら現場に立ち会わねばならない教誨師(僧や神父)らの心中も苦しい。

各関係者の中で中心的位置を占めるのは, 被害者遺族であろう。多くが「被告には極刑を」と言うが, 逆にそれを望まない人たちもいる。

また死刑囚の中には, 判決確定後, 反省し, 自ら手にかけて被害者の冥福を朝に晩に祈り続ける者もいる。

参議院議員で弁護士でもある福島瑞穂らが毎年死刑確定者百数十名からアンケートをとり, その声を本にまとめている(『年報・死刑廃止 2015 死刑囚監房から』インパクト出版会)。

これらを参考に, 板書, プリントを駆使して, 結局現行の死刑制度に直接関わる人々全員が悩み, 苦しんでいるのが現状であることを強調する。

最後はまた黒板に戻り, 「賛成」「反対」の代表的意見を書いた大判の模造紙を貼る。

反対する人たちの多くは「冤罪」の可能性を挙げる。

1995 年, 大阪市東住吉区で, 自宅車庫から出火し, 風呂場にいた小学 6 年の長女が焼死した「東住吉事件」というのがあった。

も様々なバリエーションが考えられる。

ペアにせず、机を並べる近隣の四人で一組をつくらせ、ぐるぐる時計回りで意見を書きながら、全員の協力で「共同見解」を出させることもできる。

あるいは列ごとに一旦回収した個人の意見用紙を、そのまま別の列に再配布し、ランダムに手にとらせる。

根拠ある討論を成立させるには、実は前半部の教師によるレクチャー部分が大切になってくる。

生徒は新しい学習領域に関しては素人であるから、話しあいを始めるにあたり、それに先行して「個人でのじっくりとした思考のステップ」(杉江修治編著『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部 2006年)を入れるべきである。そのためにはインパクトあるレクチャーが必要とされる(近年脚光を浴びるアクティブ・ラーニングの一部の解説書によると、教師の説明は極力短くして、そのぶん生徒の話しあいに時間を割くとあるが、教師の講義部分が密度薄いものであるなら、生徒を充実した討論にひきずりこめない。教科・科目の特性もあるが、「講義」部分を否定できないし、「知」の伝達を軽視できない。必要なのは「講義」と「討議」の絶妙なバランスであり、「両者の十分な協奏」(溝上慎一監修『高等学校におけるアクティブラーニング』東信堂 2016年)である)。

環境設定も必要である。極端な例だが、普段の授業の殆どを教師による一方通行授業で占めておいて、ある日突然思いついたように「さあ、討論だ」と言っても生徒は乗ってこないし、そのための訓練が成されていない。

たとえ講義式の授業であっても、その何割かを常時「双方向」「多方向」型授業として意識しておけば、中身ある討論授業に導きうる。

例えば「現代社会」の単元の一つに「青年期の問題(青年心理)」がある。「通過儀礼」や「防衛機制」等についてひとつおりの講義をするが、その合間に、「青春人生相談」と銘打ったコーナーを設ける。

新聞の日曜版等の「人生相談」欄に、時折若者たちが進路や友人関係の悩み等について相談をもちかけてくる。

青年期そのものの生徒たち一人ひとりに「君ならどう回答する?」と投げかけ、相談者への回答を考えてもらう。同年代だから、相談者の心理に共鳴する愛情に満ちた回答が多くなる。

何人かに発表させてもよいし、秀逸なものは後に印刷して配布してもよい。

3 まとめ

日本経済の低迷が叫ばれて久しい。その原因の一つに、消費の伸びの鈍さ、つまり国民がモノを買わなくなったということが挙げられる。

高齢者は貯めこむばかりでモノは買わない。

一方、子育て真最中の若い世代はモノを買わざるをえず、本来は旺盛な消費活動をみせる。

だから、企業の経営陣は若い世代の消費性向・消費動向には敏感になっており、「今の若者はどういうものに興味・関心を持っているのか」を探るため、自社の会議でも新入社員には積極的に発言を求めようとする。

この時に、「自分は新人だからよく分からない」などと新人氏が泣きをみせれば、ただちに彼には「無能」のレッテルが貼られる。

一年目だろうと二年目だろうと、自分の頭でモノを考え、自分の言葉でそのつど求められることを発信していかねば、職場の中で相応の位置を占めることはできない。

教育現場と同様であろう。「駆け出しは黙っている」などと言う封建的先輩教師がいたらこれを蹴散らす気迫が必要である。

新人であれオールドであれ、自分たちはどのような生徒を実社会に送り出すべきか、という点で、近年教育現場は各方面から厳しく問われている筈である。

おとなしく、言われたことだけをこなす「指示待ち人間」を大量生産したところで、それはアルバイトと同じであり、のみならず「非正規雇用」への道を開くことになる。

今の日本社会は大リストラ時代に突入しており、その逆風の中で、自ら考え、選択し、他者とつながれる生徒を送り出すことが「正規雇用」を保障することにもなる。

毎日の授業の中で、個々の教師はこのことを常に意識しなくてはならないし、そのためには知識の伝達とともに、随所に「双方向」「多方向」型授業(アクティブ・ラーニング)を設定し、子どもたちのコミュニケーション能力・プレゼンテーション能力を高めていく必要がある。

若者を苦しめる「非正規雇用」や「ブラック企業」の実態はどうなっているのか。若者たちの多くが結婚できず、その結果この日本で「出生率」が上がらないのはどこに根本の原因が求められるのか、等、考え、話しあうべきテーマは目白押しである。

「水を打ったように静かな授業」などというシーンは今やマイナスイメージでしかない。時に、隣のクラスに迷惑をかけるような、騒々しく、かつ生産的な授業をこそ、問題意識豊富な俊秀若手教師たちと、それを目指す人々は心がけるべきであろう。

参考

- ・浅野誠『授業のワザ一挙公開』大月書店 2002年
- ・河地和子『自信力が学生を変える』平凡社 2003年
- ・『年報・死刑廃止 2015 死刑囚監房から』インパクト出版会 2015年
- ・杉江修治編著『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部 2006年
- ・溝上慎一監修『高等学校におけるアクティブ・ラーニング』東信堂 2016年